

特選
2010
日本銀行
総裁賞

「金融と経済の明日」第8回高校生小論文コンクール

今、日本の観光産業について考える

福島県・福島県立福島高等学校 1年 鈴木 悠平

日本の産業が廃れているという声をあちこちで耳にする。リーマンショック以降の大恐慌により不況の影響を受けている今、日本経済を活性化する将来有望な産業について私は考えてみた。

はじめに私は、最近注目されているIT産業などの技術開発の分野について考えてみた。しかし、今日このような技術の開発は首都圏の一部の研究者にゆだねられているのが現状である。さらに今は技術開発のための予算は削減されており、全日本的な意味での産業開発としては厳しいと考えられる。そこで私は日本独特の産業について考えてみた。日本独特の産業を考えるにあたって、重要なのは日本の文化である。

私は、今年の夏に岩手県にある中尊寺金色堂を訪れる機会があった。私は、金色に煌めく金色堂を目の前に、藤原氏や源義経などの歴史上の人物を思い浮かべた。そして、冒頭でも書いたように、不況の影響を受けて観光客も少ないのではないかと思っていたのだが、そのようなことは全く無かった。早朝にもかかわらず、遠くから来た観光客でごった返していた。中には外国人もたくさんいた。


さて、なぜこのような不況にさらされている日本で、今回訪れた中尊寺のような歴史的遺産は今もなお普遍的な人気を保ち続けているのだろうか。それは、歴史の力にあると思う。例えば中尊寺には、藤原氏の興亡や、源義経の逃亡とその終末の悲劇。日本史上で欠かすことのできない壮大なストーリーがある。そうしたストーリーは1,000年近く経た現在でも、色褪せることはなく、たくさんの人を惹き付け離すことはない。それは日本の大きな遺産でもあると思う。そして、その遺産は日本の2,000年近くにわたる長年の歴史によって熟成され、確かな文化として我々日本人の心によって語り継がれている。その歴史は、中国やローマなどの世界の名だたる帝国の歴史にも引けをとることはない。今の世界のリーダーであるところのアメリカなどは遠く及ばない。

今こそ、その歴史的遺産を不況打開のために使えないだろうか。今の日本には、神社仏閣などの数多くの歴史的建造物だけではなく茶道などに代表される精神的な遺産が数多く残されている。これを「日本遺産」として利用することができるのではないかと考えた。これはまさに大きな「産業」になりうると考えたのだ。

近年、世界中でグローバル化が進められている。私は国同士が仲良くする、そして協力して、世界的な問題に当たるべきだという考え方には大いに賛同できる。しかし、世界にはいろいろな国がある。環境も文化も精神も大きく異なるのである。これらの国々がすべて一緒に、というのは無理があるのではないだろうか。このような理由から、私は単純なるグローバル化に賛成することには注意を払うべきと考える。文化とは国民の知恵そのものである。雪がたくさん降る地域では雪の重みで信号機が落ちないように信号機をたてにしたり、水不足になりがちな沖縄では水をタンクに溜めておいて保存したりというように、地域ごとに知恵を出して生活しているのである。このような地域を画一化し、同じ価値観によって統一することは難しいと思う。画一化することではなく、むしろその多様性を理解し、楽しむことが今後の世界の発展には重要であると言われているし、この点に私は賛同できる。そして私はこの考えを地域産業の発展に応用できないかと考えたのである。

おそらく、これら地域ごとの特性に注目した産業の開発は今後大きな可能性を秘めているのではないかと考える。なぜなら長い歴史によって支えられた文化に基づく産業は、不況によってその価値が変わることがないと思うからである。もちろん、不況下では人々は観光にお金を払うことが減るかもしれないが、歴史に魅了された人々の存在はいつの世も不変であるし、物事のルーツを知りたいという欲求は、より普遍的なものとして我々は認識しているはずだ。

我々が知る文化を産業へ押し上げる際に大切なことは、いかに認知度を高めるかである。私はここにこそ、現在発展を続けるインターネット技術を使うべきだと考える。古来の文化と最新の技術の融合を試みるのである。すでにインターネット上には多くの文化に関わるコンテンツが存在しているが、これをさらに発展させ、例えば現地に行くことなくして、現地の雰囲気味わうことができるような工夫をするのだ。現在あるコンテンツの多くは、単なる現地の紹介や、アクセスを示すだけのものがほとんどであり、見ることで、現地に行ってみたくなる、言う



なればわくわくするようなコンテンツに出会うことはほとんどない。たくさんのマスメディアと動画や3D技術を含めた最新技術を数多く利用していくことが重要で、さらには中途半端ではない、高いレベルの「情報」をコンテンツに組み込むことでその完成度は高まり、結果として多くの人々がその文化に触れ親しむことになるのではないか。ひいては、多くの人々が現地でその物を直接見たいという強い欲求へと導くものとする。インターネットは情報を得るにはとても優れたツールである。脳科学者の茂木健一郎さんは、将来インターネットだけで学び、ノーベル賞をとる人が出るかもしれないと言っているほどである。歴史的な文化にこそインターネットを使うべきである。

我々が有する歴史文化を新たな産業の芽とするためのいくつかの意見を述べてきた。この不況だからこそ、長年の月日が経っても普遍的な価値を持ち続けている歴史的な建造物や精神的で高度な日本文化を新たな産業の柱として、応用すべきと考える。そのためには国をあげた努力を惜しんではならない。私たちは忘れていくかもしれないが、国際的にみれば、日本のアニメやテレビゲームは素晴らしいと評判である。さらに日本独特の音楽、演歌なども素晴らしい日本固有の文化であると世界はすでに認識し始めている。マッチャもスシも今ではすでに世界で知られた食べ物である。今こそ、古くからある貴重な文化を新たな技術に包んで、世界へ発信するべきではないだろうか。欧米に Old wine in a new bottle. という言葉がある。Old wine (歴史文化)をNew bottle (インターネット)に入れてみることも一案ではないだろうか。

